女學雜誌

一冊六錢

各土曜日出版

第百八拾壹號

當府內無郵稅

郵稅一錢

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

雜 女 誌 學

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 181. SEPTEMBER 28TH, 1889.

EDITORIAL:—Women's Friend (No. I) Distinguish Friend from Foe.
LEADING ARTICLE: — On the Death of a House-Dog.
CRITICAL NOTES:—"Yamato Shōkun."
MISCELLANEOUS:— Man's One Great Duty. Lytton and Burns. A Wise Son. (continued.) Customs among Women of Old Pictorial Art in Japan and the West.
DROLLERY.
CHILDREN'S COLUMN.
HISTORICAL RECREATIONS:— Madame de Stael and her Friend.
NOVEL:— "Heaar tnd Mind."
CONTRIBUTED ARTICLES.
GENERAL NEWS.
FOREIGN NEWS.

第百八十一號目錄

社説 婦女子之友
論說 家犬埋葬の辭ば
批評 紅葉山人の「やまと昭君」
雜錄 人間の務め唯一つ○リットンとバーンス○黄表紙○すねもの
笑草 ○三本の毛で大願成就○百年目○落ちた錢を拾ふ眼鏡○緞の火事羽織
見鑑 チャーレーの强膽
史傳 マダム、ローランドとカンチツト姉妹の交
小說 母猿一叫
寄書 一片の老婆心
新報 淸人花を移さんとす○世上忙々、眞個漫遊○支那婦女收養局○普通平和協會○萬國禁酒會議○第二レビット夫人來らんとす
片々 華族女學校行啓○皇女常宮殿下の御歸京○有栖川故緖子女王の三年祭○婦人科の設置○一ツ橋幼稚園○婦人慈善會幹事會○佛教•家慈善會○婦人衞生會○其他八件

WOMEN IN JAPAN.

(1) *The blind are interesting themselves in the political signs of the times. Four of these enthusiasts spoke last week in the heart of Tokyo on subjects as the following :— "PATRIOTISM," "THE INDEPENDENCE OF A NATION," "ON READING THE NEW CONSTITUTION," &c.*

The same class of men are bestiring themselves to increase the means for their independent support, and a blind man in Awomori Prefecture is planning to organize a society for the furtherance of this end.

(2) *A new association to reform Japan's stage productions is headed by Viscount Hijikata assisted by Viscount Kagawa and has some eminent literary men among its different committees as well as actors, singers, story-tellers, etc.*

(3) *Mr. Shimada gave two most interesting lectures concerning his impressions while he was abroad, one of them at the Banchō Chapel and another at "The Meiji Gakkō." His theme in both was that the Occidental civilization had a moral life aside from its material magnificence and which it was keeping from corruption.*

女 學 雜 誌

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百八十一號
明治二十二年九月廿八日發兌

社說

○婦女子之友

總論 汝曹が友敵を識別すべし

河水の流るゝを見よ、其將に海に入らんとするや水勢洪々滔々たり、然れども若し其流れを溯のぼりて山間谿谷の界ひに至れば、原泉沸々として只だ僅かに地中より湧き出るを見るあり、而して此の沸々の水先づ窪きに集まり、稍や流勢を得て發し、岩石腐草の間だを瀉り、斜面凸凹の地に浮沈し、或は縷々として漸やく一髪の脈を續ぎ、或は全く地中に沒して久しく其跡を絶つとあり、誰か此の憫れむべき溪流の遂に彼の洪滔たる大河となるとを思わんや。夫れ溪流の細きと實に絲の如し、然れども糸は之を合すれば能く鐵艦を曳くべし、此如く溪流の唯一にして行くや只だ其絶たざるを幸わいとなせども、其の一と度び幾多の同じき流れと合し來るや、水勢二となり、三となり、四となり、五六七八となり、遂に其の原流に九倍し、十倍し、百倍し、千倍し、萬々倍するの大流大川となる。於此乎其聲千雷を轟かすが如く、其勢ほひ天を浸たし地を沒すが如く、最早何如なる障害物をも衝破り、押流し、甚はだしきは山岳を崩し、人家大橋を破り、天下到る所ろに敵なく、白面冷々、豪然として彼の洋海に朝す、其勢威すさまじくも亦た驚ろくべき也。

大河の能く如此く強大なるは、其幾百川を合するが故なり。

蓋し無數の川其方向を同じくし、和混合同行して流るゝが故に遂に此の強大を爲すなり、故にたとひ細流と云へども能く其の同方向の流れに合すれば後ち大流となるべし、大流と云へども若し其同方向の流れに合せずんば暫らくにして水涸れ骨を暴らすに至らん、人世の萬事大率ね亦た如此し。

夫れ人何如に長大なるものありと云へども身七寸を越ゆる能はず、力何如に強きものありと云へども能く千斤を擧る能はず、壽何如に長きものありと云へども能く二百年を生くるとなし、左れば此の人世界第一の巨人にして、世界第一の力量に富み、尚ほ世界第一の長命を得たりとするも、彼れ若し其一身の力をのみ頼みて獨個に働らきたりとせば、彼が爲し得る所ろ最大にして僅かに二三人前の事業に過ぎず、安んぞ之を大事業なりと云はんや。聞く義經は力至つて弱く辛ふじて弓の薄弱なる者を彎きたりと、而して彼が兄頼朝は短軀細身

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

にして鎌倉の政座に適せず、其命亦久しきを得ずして早世したり、然れども力三十八を兼る能登の守教經は墓なくも壇の浦に於て水葬し、彼の弱力なる九郎判官は平家を鏖滅したり、幾多の壯大美貌なる京紳士は其骨肉を荷ふて死し、彼の小軀醜面なる源右府は遂に天下を一統したり。故に一人の力量の多少は未だ以て事業を爲すの大小を起すに足らず、其の能く衆と合するの多少を以て遂に事業を爲すの最大最小を起し來るなり。

左れば事を天下に爲さんと欲するものは、先づ其の合力すべきものを集むるを主要とす、苟くも同志ありて力を合するときは、敵に向ふて恐るゝ所ろなく、顧みて安んずる所ろ多く、濶歩勇進して助けあると極めて確かなり、此に於てか非常の大事業をも爲し得るなり。蓋し天は最大多數によりて其の聖旨を洩らすか、最大多數に適する所ろのもの則はち玆に眞理となり、最大多數に幸する所ろのもの則はち玆に道となり、最大多數を安んずる所ろのもの則ち玆に長となり主となる、之を以て成るべく多く人の志を合し得る所ろの事は則はち大事業となりて盛存し、又萬人に逆らわれ古今將來に於て不賛成せらるゝ所ろの事は則はち惡事業となりて滅絕す、嗚呼天の下に立つや人は猶ほ一躰の同胞の如し、上帝之をして相ひ和睦親交せしむ、故に相ひ和睦して成す所ろの者は盛え、親交して企だつる所ろの事は成就す、天の時地の利人に善ならざるにあらず、尤も人に善なるものは即はち人の和也。

左れば人は成るべく多く人と相ひ和合するを義務とす、見よ一身に於て心情意の能く和合するものは聖人となる、交道に於て愛思の能く和合するものは良友となる、一家に於て交わりの能く和合するものは善家となる、其他皆な如此くして同朋となり、政黨となり、國人となり、萬國公法となり、天下太平となり、和合の區域いよ／＼廣ろくして人世を幸わひにするといよ／＼多く、和合の交際ます／＼固くして人事を滑らかにするとます／＼善からずや。

夫れ人は成るべく多く人と相ひ和合せんとを欲す、故に明らかに友敵を區別し、若し相ひ敵せねばならぬものあるときは斷然として之に反對すべし、尤も明白に敵に反對するものは即はち尤も親密に其友に交わるもの也、人もとより敵あるを欲せず、然れども到底敵なくして存しがたきの世の中に於ては止を得ず之を敵として十分に敵對すべし、故に之に敵對するとの至て強き割合に其友人に味方すると極めて温かに、團々

三

わが同志を糾合し化同し、我友多數なりや否や、敵の人多數なりや否や、能く公平に其最大多數を比較して以て天意の存する所ろを見るべし。

之を以て人は明らかに其の友とすべき所ろ、敵とすべき所ろを鑑別するを要す、友人となりては能く其友を擇ばざれば徳を立つると難し、主義を擴張するに於ては能く政敵政友を判別し成るべく多く同志者を得るに非ずんば其の望みを達すると難し、之より大にして國相ひ双らび万邦坤輿に連立する時に於ては、國と國と能く同志異心を察し同志の國相連衡して異心の國と對するに非ずんば一國の安危定まるとなし、故に人世の事、細は其の一身を立つるより、大は一國の命運を安んずるに至る迄で、先づ能く其友敵を區別し、敵に逆らい友に合するの覺悟綿密なるとを要せざるはなし。

山陽嘗て戯むれに項羽高祖の優劣を論じ、項羽は能く力山を拔き、氣世を葢ひ、雄志勃々として向ふ所ろ敵するものなく、百戰百勝して一世の衆英雄を瞠若たらしめたり、高祖は何者ぞ、能く人を罵しり高く大言すと云へども彼れ項羽に會するときは恰かも小兒の如し、垓下の一戰辛ふじて之れに勝ち得たりと云へども其の勝計英略に至りては遠く羽に及ぶものにあらずと云へり、然り若し彼等をして一人づゝ相ひ撲たしめば高祖は恐らく鼠の如く、項羽は必らず猫の如くなりしならん、否な高祖も亦た一世の英雄にして彼れこそ猫の如くなりしと云ふものあらんには、項羽は即はち虎の如きものにてありしならん、夫れ彼等一人宛を比較するときは實に如此くなりし、然れども項羽は其の范增をすら用ゆる能はざるに、高祖は能く盜人にも合し、跨下の少年にも合し、亡國の敗臣にも合したるが故に、遂に大業を建てたり。又我國に於て能く高祖たるものは即はち太閤秀吉にして、寧ろ項羽に似たるものは即はち織田信長なるべし、信長濶達にして雄略あり常時虎獅相鬪ふを覘がふて獨り遠見し、英雄猶ほ野に血戰するとき彼れ先づ帝城に入れり、内大臣となれり、天下を掌握したり、家康の如きものも之に屈從し、秀吉の如きものも之に臣服せざる能わざりき、然れども信長は能く人を用ゆるものに非ず況んや能く人に合するをや、秀吉嘗て重賞を辭し其郎黨に云つて曰く、主公外か優に似して内猜忌なり吾れもし大封を受くるときは必らず終りを全ふすると能わじと、信長の人をして合せしめざる如此し、故に彼れ覇權を握る數年ならず、乍ち内より反臣を出して本能寺中に虐殺せらる、之

Digitized by Google Original from COLUMBIA UNIVERSITY

を彼の國を畧取すれば國を與へ、人を用ゆれば人に任じ、身を終るまで當世第一の强雄を屈服せしめ、身死して尙ほ遺子に加黨籠城するの忠臣を遺したる秀吉に比較して何如ぞや、宜べなり、織田氏の祖先すでに德を布く久しきに拘らず暫らくにして嗣を滅し、豐臣氏の祖先土百姓たるに拘らず一代にして亂世を鎭撫し英傑を從がへ天下を一統し威光を海外に輝やかし雄名を万世に轟かしたること。

此に至りて人に合するの用を見るといよ〳〵切なり、苟くも事を爲さんとするものは先づ此の主訣を知るべし、况んや今まは微弱にして後に最大ならんとを熱望するものゝ如きは、勉めて盤根錯節の間だに處理して明らかに友を鑑別し、成るべく多く同志者を糾合して其所望を達すべき也。

吾人は彼の愛兒蘭獨立黨が英國の二大政黨改進保守の兩派間に屹立するを見、又た彼の禁酒第三黨が米國の二大政黨たる共和合衆の兩派間に頭を擡げ來るを見、轉た感激に堪へず。

彼のパーネル氏の爲す所ろを見よ、彼は主として愛兒蘭の獨立を計り、其の本國に別個の巴利門を開かんとを熱望するなり、故に時としてはグラッドストンに敵するとあり、時としてはサウリスベリーに加黨するとあり、又飜然として自由黨に加盟し保守黨の內閣を覆がへすとあり、彼が行爲狂奇變矯なるが如しと云へども其の變じて常なき所ろは即ち彼が志望の確固にして恒に變らざる所ろなり、何んとなれば彼は愛兒蘭獨立黨の友敵を判す、若し其黨見に敵するものあらば改進黨と云へどもすでに敵なり、若し其黨見に和するものあらば保守黨といへどもすでに味方也、英國の政事海より觀察して改進保守を見るの重からざるに非らず、彼は之よりも尙ほ重く愛兒蘭獨立の上より見來るが故に即はち或る時は一を敵とし又之を味方と爲さゞる可らず、蓋し僅々たる黨員を率ひて多數の兩黨員の間に介立す、彼が處置實に此の如くならずんば其志を達しがたき也、而して米國禁酒第三政黨の爲す所ろ亦漸く彼れに似來る、大凡そ微弱なるものゝ其の勢力を張らんとするや尤とも此の鑑識の明らかなるものなかる可らず。

吾人は我國の女權贊成家に向つて必らずしも如此き黨畧を學べよと云ふに非ず、然れども苟くも汝曹の主義を正大なりとし、汝曹の意見を公明なりとし、其の公明正大なるの信を日本國に擴張して善を成し遂げんと欲するに於ては、先づ汝曹に贊成するものゝ果して誰なりや、汝曹を助くるものゝ果し

て誰なりや、汝曹が敵となし若くは友と爲すべきものゝ果して誰なるやを明らかに識別するを要す、若し夫れ寸前暗黑にして亂射亂走せば、養由の矢と云へども當らず、蒸氣車と云へども達することなし。

論說

○家犬埋葬の辭

月の舍しのぶ

一夜われ遲そく歸る、細君門に待ちて望み數十步を復へし回らして輾轉す、われ等端なく相伺して喜こぶとき路傍しきりに幼犬の叫ぶを聞く、來り見れば產後未だ二十日を經ざるもの悲しくも玆に棄てられて車に足を引かれたるなり、余れ近づきて之を撫せんとすれば彼いよ〳〵叫ぶ、細君近づきて溫呼するに彼なほ叫びを止めず、蓋し彼れ吾等を見て己れを害するものとするなり、然れども吾等實に彼れを害せず、聲を和らげて呼び、手を附して撫で、徐むろに彼が頭らを叩けば彼漸やくにして安んじ、遂に吾等を窺がひ見て尾を揮るに至れり、則はち余れ彼が泥に塗みれたる兩手足を握り、靜かに抱ひて歸る、細君先づ趨り入りて湯水を備へ、相ひ之を洗ふ、異臭紛々として嗅ぐに堪へず、然れども洗ひ了れば稍や異なりたる觀あり、彼亦た切りに微聲を發して鳴く、其鳴くや蓋し悲しむに非ず謝する如く喜こぶが如し、余細君と計り之を我が家族の下に附せんと云ひ、下婢に報じ、時を定めて余が飮むべかりし牛乳を與ふ、細君之に名を與へてジヤムポーと云ふ、ジヤムポー之よりして余が邸中にあり、大抵庭にありて遊ぶ、細君出れば戯むれ、余れ外より歸れば鳴く、自づから吾等が情を通じ悟りしが如し。

居ると數日、彼れ漸やくにして衰ろふ、之に乳を與ふるに飮まず、飯を與ふるに僅かに試みて亦食わず、後足を引きて苦步し、屢ば困倒して叫ぶ、而して吾等を見て鳴くとき其聲極めて悲し、細君切りに憂ひて余に計らる、余が友人にして獸醫の博士たるものあれど今ま都に在るなし、隣家に人を診するものはあれど能く之を療やさんとも思わず、余等只だ歎いて爲すとなし、然るにジヤムポー日に弱はり行き、遂に其の臥床より出でがたきに至り、苦聲邸中にひゞく。

時維れ明治二十二年九月二十日、朝起きて椽側に出で彼を見れば、彼れ氣息將に絕たんとして胴腹波の如く動き、既に聲を發するとなく蒼蠅群がり來る、余れ之を熟視して嗟嘆すると久し、嗚呼汝ち何處に產れ、誰れを母とするやを知らず、

病みて藥を飮みしとなく、死するに看するものあるなし、今ま定めて苦しからん余れ之を除くに由なし、嗚呼汝ぢ抑そも何の爲に世に產れ來れる、卒然として土石に躋り生じ來り、又忽焉として土石に化す、汝ぢが終生の運命は何事にして此の大宇宙間に現はれ來りたる目的は何ぞ、然れども人類の世に出づるも亦如此く、其の世より沒するも亦如此きか、特に一家親戚を喜ばせ、父母兄弟を煩はして玉の如く生れ、綠々として育するも一月に足らずして忽ち死する所ろの赤兒に至りては、就中よく汝ぢと相似たるものなり、余れ必らずしも汝ぢ犬類の爲にのみ悲しまず、實に生物惣躰の爲に思ふ、嗚呼生とし生けるものゝ末期果して如此きかと、則はち細君に告げて後事を托し出で行きたり、而して日晚れ歸り來るときはシャムポー既に全く死し、家族悉とく憂ふ、余れ淒々として食を執るとなし。

余れ玆に至りて思ひ出すも甚はだ多し、先づ人世に於て豪傑と稱し英雄と呼ばるゝものは抑そも如何なる人か、若し萬骨を枯して一身の功名を貪ぼり、又は百姓を塗炭の苦に落して千古の大伽藍を造るの類を以て彼等が事業なりとせば、英雄豪傑なるものは人間の尤とも慘酷なるものならん、然らば之を人中の怪物と云ひモンスターと云ふは宜し、稱して人間の最大なるものと爲すに至りては實に其解を知らず。昔しナポレオン一世は全歐を震動したり、其馬足の踏む所ろは草を枯らし、人を殺ろし、國を亡ぼしたり、然れども之が爲めに喜こぶものは人の頭を切りたるの勇士のみ、敵の寶らを奪略したる盜人のみ、而して之が爲めに泣くものは啻に敵國の人のみにあらず實に彼に從屬したる數多の兵士も、古鄕を慕ひて泣、同類を失なひて泣けり、若し夫れ戰場に於て兄を打れ、夫を殺ろされ、久しく凱旋を望みたる代りに空しく其の訃報に接したる彼の佛都幾十万の弟妻に至りては、其の悲しき歎げき天に達せんとす、夫れナポレオンは實に如此く人世に苦しみを與へたり、而して其の人世を益したると何にありやを知らず、然れども尙ほ之を英雄豪傑と稱すべき乎、苟くも之を人中の最大なるものと云ふとを得ば、人は其情を冷にし、其心を固くし、其志ざしを卑くし、只だ利慾名慾を貪ぼりて同胞兄弟を苦しむるとを專一とすべし、若し之に於て彌よ長ずる所ろあらば即はち英雄たり、若し之に於て彌よ長ずる所ろなくば即はち豪傑たるを得ず、嗚呼人世の長短高下は果して如此にして定むべき乎。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

われ思ふに決して然ることなし、抑そも功名富貴は何物なりや、其の味果して甘きか、其氣果して香ばしきか、其力果して殊なるか、已れ得て之を知らず。苟くも之を得て樂しみ極まるとせば寧しろ可なり、然れどもわれ未だ功名富貴に安樂の必伴するを知らず、夫れ文字を知るは憂患の初めにして、功成り名遂ぐるは苦慮の終りなり、如此にして倘ほ功名富貴樂しきか、われ得て之を知らず。よしたとひ此等を以て味佳氣香而して安樂十全なるものとせよ、然れども此の如きものを受くるの間抑そも幾干ぞや、人生七十なること古來甚はだ稀れなり、彼の功名富貴を得んと欲して非常の苦を成し、殆んど人生の全半を失なひ、只だ其餘命に於て此等の滿足を得、加減し來りてわれ果して其の樂しみ多きや否やを知らず。よしたとひ其の樂しみ多しとせよ、われ等たゞ樂しみを望みて勞苦すること實にわれ等の衷心に適ふ所ろありや、われ夙に思へらく然ることなしと、今ま顧みるに特に其然らざるを思ふ、日前ジャムポーの死せしを見ていよ／＼其然るなきを知れり。

嗚呼眞正の英雄豪傑なるものは決して如此き人にあらず、彼等は寧ろ平和靜寂ならんことを望む、若し得べくんば山林に隱れ、田野に耕やし、靜かに讀書談話して衆と相ひ樂しまんことを欲するなり、所謂る功名なるものは彼に於て何の關はりもあるなし、何んとなれば彼等は功名に優るの者を有すればあり、彼等は富貴を望むことなし、富貴ならざるも能く其の樂しみを得べければ也、實に彼等は富貴功名を貪ぼることなし、たゞ一家安く、一村安く、一國安く、天下平らかならんことを理想す、たとへば風和ぎ、氣溫やかにして、四面悉ごとく沈眠するが如きを祈るなり。然れども世事大抵然ることなく、或は天災來りて四民を苦しめ、或は外讎わだして國人を苦しめ、或は上の政治宜しきを得ずして下民大ひに難やむことあり、若し夫れ如此きに至れば彼等が民を愛し平和を祈るの素心は則はち安きことを得ず、於此乎止を得ずして起ち、勃然として怒り、奮然として慨し、則はち大ひに慷叫して動く、之れ英雄豪傑山を出るの時にして、必竟彼れ出でざれば蒼生を何如んとも爲しがたきを自信するが故也、之を以て彼等若し其の望む所ろを達すれば則はち俄然として元に復し、或は切りに田野山林に歸らんことを乞ひ、或は平素沈鬱として快なることなし、昔し大事に獅子の如く奮立したるもの、今は則はち兎の如く柔和なることあり、之を英雄豪傑の本色となす也。

此故に英雄豪傑は之を何の時に於ても用ゆべきにあらず、彼

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

は甚だ不器用なり、細事に用ひがたし、彼は甚だ沈靜なり、平常相狎る可らず、たとへば彼は頑々たる巨石の如し、或は山間に、或は野外に、落乎屈然として只だ土中に埋もれ存す、小兒もとより之を動かす可らず、細人もとより之を動かす可らず、村人亦固より之を動かすことを得ず、只だ夫れ大風起り、天下荒れ、木倒れ砂飛んで彼が安んずるの地を覆がへすとき、彼れ止を得ずして全躰を現はし來るなり、然れども大風止み、天下靜まり、四面元に復するときは、彼れすでに亦た平時の用に立つべきにあらず、英雄豪傑の天質蓋し如此し。

故に國家亂れてのち初めて偉人起る、彼は功名に激せられて立つにあらず、富貴に望みて起るにあらず、只だ民を愛するによりて止を得ず出で來るもの也、之を以て知る、英雄豪傑は是れ情に於て尤も温たかなるものなり、彼は人よりも多く泣き、人よりも長く泣く、則ち其の眞衷は寧しろ婦人の如きもの歟、而して意思亦た甚だ強く、智力亦極めて確固なり、夫れ只だ如此く人の人性を完うす、故に人中の最大なるものとなり、英雄豪傑を其眞の意義に於て自得す。

嗚呼ジヤムボー、汝ぢ倘ほ靈ありや、人も家畜も相ひ似たる所ろあり、汝ぢ亦た上帝に造られて出で、われ等亦た上帝に造られて存す、汝ぢ既に命を盡して死せり、死亦た上帝の今日汝ぢに命ぜし所ろにあらずや、われ等の生存すると亦た命を受る所ろなり、生死出沒たゞ天にあり、われら只だ天性に循がひ、天命を奉じ、能ふ限り、出來る限り、愛民敬神の事業を爲し得ば足れり、后ちわれ等亦た化して汝ぢと均しく土石たらん、其日われら亦た汝ぢに同じ、汝ぢ固より怨む所ろなけん、われ今ま安きを得たり、ジアムボー靈あらば希はくは來り享けよ。

批評

○紅葉山人の「やまと昭君」　　花竹堂

||たゞなつかしの人々に逢ふ事の嬉しさよ||。世に出でぬ先より御噂は聞き候ひしがショール——ボンチットの今樣振の中へ異樣の物數寄に紫の組にて留めたる大振袖の御姿を拜し參らせては見へぬ御光に尊く覺へ山々思ふ百分一をは書きつらね申すべし。腹黒き毛延壽が筆と思ひ給ひぞ。

廣告に增補大和昭君とありしかば、ハテナ新選我樂多文庫が出さふなものと怪みしに鸚鵡に琵琶の艶なる表紙にたゞ||や

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

まと昭君＝トあるを見て一ト安心。紅葉大人は何故に豔なる表紙を好まるゝや、近日の風雅娘と云ひ又此大和昭君、いづれも艶中の艶にして作者得意の文字と大に背馳するに似り、これ柿の色赤けれどもなほ澁きが如きか。

自序おとなしくてよし、人はかくこそありたけれ卜大ぽめにほめて置くべし。

さば明治の西鶴通はおれダト曰はぬ計りに世の流行にも媚び別に趣向もなく、さればとて無論リアル主義にてもなく、中ず萬事元祿好に古物家の喝采を頼に世間俗物の雷同を願はずといふ大見識なればまづ文字の鑑賞が肝要ヂヤテ。

西鶴の神靈夢枕に立ちて秘書を授けられしものか、紅葉大人何ぞ其文字に自在なるや。馬琴春水の唾を呧りリツトン——ヂスレリーの粕を喰ふ文界に百載の後西鶴の門を振はんとて俳偕の文字を並べて明治の風調を動かす勇氣凛として犯すべからず。文學者實に此氣象なくんば靜間亞流と仝様なり、徒らに時俗に阿り好尙に諂らふは是ぞ世間俗物のみ。

本書の價値は一之卷にあり、一之卷の價値は實に左の文字にあり、是ほどの才筆今の世にありとは妬まし。

「(上客)琴は八橋撿校の秘曲を傳へて、花の宴月の宴、よし風が吹ても雲が出ても此爪音なくてはとの難有き御詞。手跡は瀧本の流を酌みて、ちらし書の麗はしさ。書捨の反古さへ手に入れる若侍は此を元結にしてゆかしがりける。姿を聞くものは五分の戀に亂れ、じき〳〵に拜し參らせては(君の御馬前)まで預り物の一命を用捨もなくわが物にしてそも此様の庭草の露にも消なんと無分別に惱ます心幾個とも數へがたし。(中略)何様の御化身にや、闇で見たら御光が見へさふなもの。」〔六頁〕

「涙に摺る墨——無念にかむ筆、花にも鳥にもすら〳〵と歌を聯ぬる身が、取亂しては前後不覺の文言、三尺餘りの卷紙にわづか胸三寸の萬分一を籠めて、これを遺物にしていたはしや一葉、王昭君の怨を呑みて行く先は‥‥霜白く、草葉茵なる千里の遠きにあらで、裏の肱掛窓から一つ向ふに見ゆる黒塀がそれなり」。〔十頁〕

是等の文字絶妙、これが馬琴以後の今日にあらんとは夢にも思はざりき、今日の文界にては恐らく紅葉大人の專賣特許。竹の舍の老先生を其碩と褒めて適當なら紅葉の若大將は西鶴と申すも適當ならん、共に純粋の其碩にも西鶴にもあらぬ處が千金。

三頁に戀雜云々との解釋、こゝら西鶴には微塵もない文字にて大方西洋の詩から脫胎したものならんと推せらるゝが元錄振の文字の好きなわが考へてはあまりに面白からず、中が凡て西鶴ならば冒頭計り西洋からずとも別に考案がありさうなもの。凡てが西鶴を丸で脫出せば兎にかく一部分が少々づゝ脫出したものに飛はなれた、曰はゞ直譯風の――言文一致流の講釋軆を持出すはチト「猿虎蛇」とでも申すへきか。

西鶴の時代は既に二百有餘年の往昔となりたれば文軆にも今日に釣合ぬ處多し、其時に於てなほ許すべからざる缺點をも倣ふは大なる誤謬。西鶴は平氣で猥褻の文字を聯ねしが紅葉大人は何故に此弊を避けられざりしや。六頁の十行十頁の十行の如きはチトお謹しみありたし。

アラビヤ夜譚の趣向を取らるゝとは全軆に面白くなし。今少し別に御考のありさふなもの。「京人形」と云ひ「色懺悔」と云ひ又近日「風雅娘」と云ひ、いづれも數段の上と申すべし。

二之卷面白し。次の詞わけて妙あり、

「それと申すもこの親鳥と申すのが神通を得ましたもので是はまた見た事をすらくく饒舌ましたさふで……」

「ふゥむ……てな」

善助のはなし「日本の地をあちらへ去る事二萬三千里、御案內樣の和蘭陀の都はキャピタンに」は頗る妙。

三之卷全篇の主眼なり。お桂がお末になぶらるゝ處面白し、こゝら輕快なる筆、是も竹の舍の主人と異なりたる味ありて紅葉大人の獨得。

四之卷一番劣るが如し、唯次の句はうまし。

「天下に主君もなく我身もなく唯是ばかりに諸事を忘るれば一葉が詞はつれなくてもやさしくてもそれには論なし。其唇に觸れし音聲――其胸が釀せし音聲は無二の妙音に響きて寒冒がするほどの喜悅。」

兎にかく近來になき好文字、秀句に富みたるは實に無双、但し「風雅むすめ」に比ぶればチト見劣りする樣なり。たゞ敬服々々とこそ申すべし、些々たる瑕瑾は論らふべき事かは。

雜錄

○人間の務め唯一つ　かすみ

人は何によりて動植と異なるや、食ふとは犬も能く食ふにあらずや、歌ふとは虫も能く歌ふに非ずや、動くとは草葉も能く動くに非ずや、若し夫れ子を愛するとに至りては猫も能く

愛し、物を覺ゆることに至りては鵝鴿も能く覺ゆるに非ずや、左らば何によりて人は動植と異なる乎。

われ之を生物學者に聞くに、人は動物よりも多く善惡を辨別すと云へり、之を道德學者に聞くに、動物に良心なくして人には之れありと云へり。然らば則はち人には良心ありて善惡を識り、善は之を爲さんことを欲し、惡は之を爲さゝらんことを欲するの性あり、而して動植物には之れあるなき、以て彼等が間だに存するの相違と爲すべし。

然らば人は善惡を別ち良心の指揮に從ふものなり、人にして若し之れなくんば動植に均し、之れあれば則はち初めて人と爲ることを得る也、一言するに動植は理化學、社會學上に於ける生物也、人は此等の上に更らに道德を加へたるの生物也、人と草木禽獸との相違は、道德上の法律の加はること加らざることに存す。

然るに道德界には唯二つの道あり、曰く仁と不仁と、別言するに善と惡と是也、之を解すれば、大凡そ人間の行爲は善ならずんは惡なり、惡ならずんば善なり、善ならず惡あらざるの行爲は決して人にあることなし、蓋し之れあらん然れども之れ人事として視るべきの行爲にあらず唯だ動物としての行爲たるに過ぎず。若し夫れ行爲の決果によりて之を判する時は行ひに善ならず惡ならざるが如き行爲も見ゆるならん、然れども人の之を意思（インテンション）に於て思ふときは必らず善とし惡として識別するの念なくんばあらず、苟くも若し然ることなくんば之れ倘ほ動物としての事を爲すのみ、未だ人事とすべきの行爲を爲し居るの時に非ず。

既に人事に唯だ二つの道あるを知らば、則はち何人と云へども常に善に向ひ惡に遠ざかり、善に望み惡を退くるの覺悟なくんばある可らず、若し然ることなくんば其人、漸やく動物に近づくなり、苟くも然らは之れ人として進む也、其一を爲さば墮落するなり、他の一を爲さば進化するなり、其一を爲さば惡魔たらんとする也、他の一を爲さば天使たらんとするあり、此に於てか何人と云へども決する所ろあるべし。

左れば人間萬事の理想は必らず善を要めざる可らず、たとひ人を喜こばす所ろの美術なりとも、たとひ自然を寫す所ろの文章なりとも、たとひ世を治むる所ろの政治なりとも、たとひ利を爭ふ所ろの商賣ありとも、苟くも之を人間當務の務めとして行わんと欲せば則はち善に於て望まざる可らず。

經に云く、吾に從がひて集めざるものは散らす也と、蓋し善

に從がつて理想せざるものは惡に厲して働らくを免れず、故に人は不完全の世に住ひ、不完全の肉衣を着せん限り、たとひ其行爲は未全く濟きを得ずとも、其望む所ろ勉むる所ろは常に善ならざる可らず、拮据して善の爲に戰ふべし、戰爭して善の爲に鬪かふべし、先づ汝等が决心を善に向けよ、ムーデー氏曰く、われ太たく一婦人の勇氣に感ず、彼女南北戰爭の時、敵近づくと聞き、火箸を握りて驅出たり、人笑つて之れ何の用を爲さんと云ふに、彼女毅然として曰く、よし敵を防ぐと能わずとも、敵に反對するとを示し得べしと。

われは各人に先づ此の决心あらんとを祈る。

○リツトンとバーンス　みどり

ゼヲヂ、マツクドナルドが有名の演說に云く、凡そ詩人に最必要なるものは其の心なりと、蓋し何如に智識かしやぎ、敎育完たく、才力すぐれたりとも、若し其の同類を愛し、草木禽獸を愛し、自然を愛し、惣じて此の宇宙間の者に通づる天來の神氣に觸れ感ずるの愛情なくんば、玆に詩人あるなし。

ロード、リツトンは著名なる文學者にて、其小說は一世を動かし、政治上社會上に感化を與へたると極めて多し、彼が學識、彼が奇想、彼が文章皆な萬人に越へたり、左れど彼は只だ一つを欠くによりて遂に詩人たるを得ず、亦詩人たるを得ざりしほどに其心善からざりし也、今日に至る迄で彼が名の高くありしとを無みするものなし、然れども彼が隣りに住ひしものすら彼を惡人なりしと云ひ、彼が細君すら倘ほ然りしと證言せるが、實に彼が小說を讀むに惡人ならでは書き得ざりしと思はるゝ句亦少なからず、即はち彼自身の著作が亦た彼の惡人なりしとを證據するなり、故に彼は其奇才奇想の寶石を數多世に遺したり、吾等之を見るに實に美くしき寶石なり、然れども其の紅寶石にも血なく、其白水晶にも天の色なし、即はち彼がダイアモンドは悉とく色さめたるものなり、彼は固より歷史中の一人物なり、彼が著作は多くの棚に飾らる、然れどもロードリツトンは既に死し、其情人世の間だに通ずるとなし、左れば若し彼が遺したる一二の温からしき小說だに無くば、彼はシウリアス、シーサーの如くに人世より遠ざかり行きしものならんに。

然るにロバート、バーンスは數百年間常に吾等の耳邊にて歌を歌ふなり、彼が性質は善なりき、清潔なりき、其上眞實なりき、然し此等よりも倘ほ重んずべきは彼は實に情にあつく人に對するの感愛最と切にてありき、彼はリツトンの如く、

書齋に隠れて坐し、冷々視して世事を戯作せしにあらで、實に泣き、喜こび、笑ひ、悲しみて眞實の歌をうたひしなり、彼は人類を愛し、自然を愛し、人世の困苦艱難に同情を有もち、壓制を悪み、卑辭を卑しみ、人らしくあるヿを貴め又はすゝめ、惣べて自らの弱點を表露して、之が爲に戰かひ、之が爲めに勉め、眞とにクリスチアンたる善徳を慕ひたり、高き人も低き人も彼を兄弟として親しみ得べし、富めるも貧しきも彼を友人として愛するヿを得べし。

リットンは文章家なり、バーンスは詩人也、リットンは戯作者なり、バーンスは眞實の歌ひ手なり、リットンは人を疑がひて遠ざかり、バーンスは人に親しみて近づけり、リットンは大ひなる器械也、バーンスは清き人間の子也。

○黄表紙　　ふ、ち、

安永天明より文化年間まで引續きて黄表紙行はる。黄表紙は黒表紙の後に出で近く御維新前まで行はれし合巻様の五枚綴二冊或は三冊ものなり。黄表紙に尊ぶべきは滑稽及諷誡にて天外より來るの奇想なり。我國の諷誡家或は滑稽家と曰はれ名の聞へたる三馬又は一九は巧手なれども其淵源は黄表紙にありて趣向大抵其範圍に出でず、例へば膝栗毛の如し。

黄表紙作者は戀川春町芝全交平澤喜三二唐來三和市場通笑櫻川慈悲成内新好を主として其外數多し。其中最も高名にして面白く、末代文學の摸範とすべきは、

金銀先生榮華之夢　安永四年　春町
高慢齋行脚日記　安永五年　仝
南無大通佛開帳　天明年中　全交
善惡邪正大勘定　三和
芝居好めくら仙人めあき仙人　通笑
むかし／＼噺問屋　好町
口合兄弟　慈悲成
江戸生浮氣の蒲燒　寛政九年　京傳
孔子縞時に藍染　天明九年　仝
紋染五郎剛勢談　文化五年　仝

黄表紙には文字の粉飾なく、殊にユーモラスの事なれば感情的にあらざる故幼稚なるものと退くれど其幼稚なる中に自然の妙味を含むは其以後絶へて見ざる所なり。三馬一九が滑稽諷誡は重きにすぐ春町全交が意外の奇想には及ばず、今の世是を傳ふるもの唯幸堂得知氏あり。

色の久しく褪めざるは純白なるものなり。

○すねもの　（下）　露伴閱。蓬矢子譯

余「御前の親父さんの名は何と御言だへ

小「石井源助と申します

余「貴様は

小「ハイ次郎です貴下

余「貴様の年は幾歳だね

小「舊暦で九歳です

余「どの位ひ毎日働くかひ

小「毎時も朝御日さまが一間ぐらひ出た頃で

余「随分早ひねお腹が空るだらう

小「イヽエ最直に晝飯食ひに行きます

余「貴様若し今十錢持て居たら何ふするかね

小「知りません何ふするかそんなに昔から持た事が御坐ひませんものを

余「貴様手遊道具を持ているかひ

小「手遊道具そりや何んなものです

余「智慧の木鐵炮喇叭劍鐵道馬車笛の様なものさ

小「イヽエそんな物は持ちませんが兄さんが道の悪ひ時にと云つて竹馬を造へて來れましたまた冬になれば千本はどを掛ますアナタ能鳥がとれますよあの目白や鶸が

余「そして貴様は外に何にも欲ひものはないかね

小「イヽエ私しはそんな物を遊ふ時がありません何故なれば平常は馬を追ひ牝牛を育て又時々久留里まで使にまいりますものを然し是れは遊んで居るのと同様です

余「そーかい然し私が思ふに若し今貴様が十錢持ていたら吃度金米糖か源平豆かそうでなければ飴でも買だらう

小「イヽエ私のお母さんは夏はむぎこがし冬は薩摩芋其の外豆入又は燒米を呉れますからそんな者は入ません

余「貴様爪を切る爲めに小刀が欲ひだらふ

小「私は持ていますホラ此に兄さんの太郎さんが呉れました

余「貴様は跣足だね下駄や草履を持ているかひ

小「ハイ宜ひ下駄を一つ持てをります

余「然し貴様跣足では痛からう

小「ナニ慣れて居るから關ひません

余「貴様の笠は破れて穴だらけではないか

小「家に宜ひのを持て居ますが御母さんがむやみにかぶると頭が痛くなるといつたから平常はかぶりません

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

余「今日は天氣が善ひが若し雨が降て來たらどうするかね
小「エー酷く降て來ら此の木の下で止むまで休んで居ます
余「家へ歸る時刻迄に腹が空たら何うするかね
小「折り〳〵生の芋を噛ります
余「然し何んにも食べるものがない時は何うするゑ
小「そんナ時には一生懸命に働ひて決してそんな事を思ひませせん
余「其方は此んな熱ひ天氣には喉が乾くだらふ
小「ハイ然し水は澤山ありますアノ森の蔭に
私しは驚きました此の子供の言葉に私は道中が好きで平常も休暇と云ふと一週間でも家を飛出しますが隨分田舎の子供が譯もないのに錢呉れ〳〵と跡に付てくるのに逢ひますそれに引返て此の子供の無欲さ一兩親が思ひやられます此の子の定めて…………
余「其方は何にも欲しく無い樣だから錢をやるのは止しませう其方はもう九歳だと言ふが學校へ行きますか
小「ハイあの親父さんが此の秋の取穫がすんだらあげてやらふと言れました
余「そんなら本がいるだろふ
小「村の五助さんも東十さんも皆んな小學讀本の一と習字本の一とを持ています
余「そうかい其れならば其本を私しが今日の御禮に買て上げやうそう親父さんに御言ひそうして私しが其方を賢ひ子だと褒めた事も私しは鹿野へ行から明日の晝頃其方の內へ尋て行きましやう――サーもう豚の方へ御出で
小「ハイ有難ふ今乘ります
余「明日逢ふよ
小「左樣なら御客さま

○三本の毛で大願成就

さる週しのぼせて鼻血を出せば見物氣の毒に思ひそれは早くぼんの窪の毛をぬくとよいと云ふ故早速三本の毛をぬいてすてれば猿手早にその毛を取て大願成就かたじけない。

○百年目

やしきがよひの呉服屋の手代とも見ゆるわかものが段町の茶屋でかげまとげいしやを澤山あつめ遊んで居るとからかみひ

と重のとなりざしきに是も全じく藝妓まじりの大さわぎ互にまけずをとらずさわぐ中にからかみばたりはづれて見れば旦那故大きにきもをつぶし「これは旦那さまか久しぶりにてお目にかゝりますと曰へば旦那「われは手代五郎兵衛ではないかにつくいやつめおれが前へ出てお久しぶりとは 五郎兵衛「あいこれが百年目でござります。

○落ちた錢を拾ふ眼鏡

湯しまの天神さま御普請立派に出來て友達誘ひに行けば女阪に遠目がねの盲ひたて「これはどこが見へます「それは上野二王門中堂が見へます、どれみやふとてのぞきなるほど〳〵上野が一ト目に見へると云ひながらむかふの方をむしやうにさがす 友達「これ〳〵八兵衛どのそこはがけでわぶないなにをするのだ「イヤ廣小路に錢が五百落ちてござるよ。

○鰻の火事羽織

章魚鰻話をしてゐる處へ脇差のひきはだを落して行く、鰻拾ひしを章魚おれにくりやれと云ふ「おぬしは何にするもゝひきにするとんだ事をいふものだ八ぽんの足を一本計り入てもつまるまい「そしておぬしは又何にするつもりだ「蒲燒の時火事羽織にする。

兒籃

○チャーレーの強膽（中）

線路の眞中につゝたち上て滊車の進行を止めんものと手にもちし角燈を一生懸命に振り立ましたチャーレーは 速力を・・・進行を御止めなさい橋が落ちたから進行を御止めなさい橋が落たから進行をと聲を限りに叫びましたが風のために聞こえたのか聞えないのか滊車はなほも十分なる速力を以て走て來ます其筈です何か變事があれは青い色の硝子を付けて滊關士に青い光を顯して見て何も事がなくば赤い硝子の付た角燈を用ゆるのですが折惡しくチャーレーの手にしたのは赤い光りを放つ技士角燈故道路に危ない事はないとのしるしと心得て走らせチャーレーの立つて居る場所までは三町位離れて居る故チャーレーの叫ぶ聲も聞えません、もう二分の後はチャーレーの傍迄列車が參りましよう四分の後になればペンシルベニヤの夜滊車は谷川のうちに落ち入るでしよう チャーレーは手に持ちし角燈の光りにいまよう〳〵氣が附て是れではいかぬと思ても青い角燈を持て來るひまがありません 私は此處で引殺されてもかまわぬが滊車がドーゾ助かる樣にし度ものだマリーのおつかさん青いランタルンを取て下さい・・・・

進行を御止めなさい橋が落た――橋が落た進行を。　何でしよう遠くで聲がしますぜ。　なに風の響でしよう。　ソーデないて確かに人の聲だソシテあの角燈の振り方がドーモおかしひナ。　でも赤色の光りです。　すこし進行をゆるやかにして御覽あさい。　先きわさつぱり分りませんがモう四分行けば何でも例の谷河デスがそれではすこし速力を弱くしましよう。　滊車は少しく進行の度をおそくしました　何か見えますぜ黒いものがピラ〳〵と木の枝でもないようだが聲が何か聞える確かに聞えるハテナもうすこし速力をよわめて見て下さい。　車長の言に滊關士は車に手をかけて速力を一層遲くしました此時緩急車より滊關車へ電氣鐘の合圖が鳴り渡りました滊關士は驚いて十分に速力を弱め前の方を見ると一人の小供が滊車道の眞中へ佇立て外套を脫捨て一生懸命に振て居ります滊關士ハ滊笛を鳴らして避けさせようと思ても少しも動きません二十間許の距離になりますとかの小供は亂暴にも石を取ては滊關車見がけて投げ付けマス。　進行を止めろ……橋が落た馬鹿メ橋が落た。――御聞あすつたか進行を何だとか申すようですそして石を取て投げ付て居ます困た者だ傍へ行け〳〵あぶないぞ怪我をするなドケ〳〵　チヤーレーは少しも動きません機關士は全く進行を止めましたが以前の速力で滊車はまだ動て居ます此時マリーの母は病苦を忘れて門口より靑いランタルンを持ち出して一生懸命に振り立てましたチヤーレーも　大聲に叫びましたがチヤーレーが立て居る場所より二尺前に滊車は全く其進行と動きを止めましたチヤーレーは十分ひき殺される積りで覺悟して居たのです。車長も多くの乘客も均しく車より下りましてチヤーレーの靑みがゝつた頰に口吻をして躍て居る心臟に手を置て抱きました車長はチヤーレーに向て。　よくも大膽に滊車道に立て居る事が出來ましたチーもし貴方が居られずば今頃私共は遠くへ行てしまつたでしよう緩急車の合圖も貴方の聲が聞た故に鐘を鳴したのだそうです命の親とはまことにこの幼なき子供の事です。　チヤーレーは平氣な顏にて、　マリーさんが早く歸ればよいにおつかさんが心配して居るものを…　私しは死ぬつもりでしたノニたすかつたノデ嬉しう思ひます、　これも神の惠みです。　噫何と云ふ信切な何と云ふ强膽な子でしよう。

鎌倉の寺に行き賴朝の頭骨と云ふを見たるに餘り小さきやうなり歷史と相違する樣に思ふて賴朝は特に大きな頭でありましたではないかと問へば、坊守の答に之はお若い時の骨です。

○女風廢れもの　　高橋おろか

御婦人方の容儀ほど種々に變るものはあらじ既に二三年前までは黒縮緬の羽織流行せしも后は鶯茶の色に變り少しく容儀よきものは此羽織を着せざるものなきに至りぬ況てや櫛笄に於ては何形、何風と稱へて新奇を競ふことなりしが束髪の起りてより櫛笄は田舍に旅立してパラ簪の跋扈する世とはなりたり然れども我國に於て櫛を用ひたるとは尤とも古よりありしが如く黄泉の段に櫛は伊邪那美命左右のみづらに櫛さしたまふと見えたり此櫛を湯津津間櫛と云ふ此男柱を引欠て火燭したもふ云々男柱とは櫛の左右の端の大なる齒を云ふ又た火火出見尊も櫛を燃して豐玉姫の御子產すを見玉ふとあり是等に因るときは其製作異なるかは知らざれども櫛たるもの此時代に於て既に用ひたる事と思はるゝなり蓋し太古の事は書籍に因て其名を知るのみ現物のあらざるを以て未だ確むる能はず夫れ書籍といへども後世の著者の手に成りたれば强ち信ずべからず信ずべきは崇神天皇（紀元五百七十年）以來三韓と交通ありし時代を以て當時の事物に由り後世全く譜とすべき物なり然れども國史は多く政治の形勢のみ記して風俗を見るに足らず源氏著れて始めて風俗人情を知るべきの書出たり故に過去の風俗を記さんと欲せば延喜このかたのことのみなりき。

過去五節に用ゆるさし櫛と云へるは類聚雜要抄に、彫櫛形黄楊にて作る髮上の時之を用ゆ又た象牙もて作りしもありと云々彫櫛の形は今云ふ三日月形にて蒔繪の入たるものなり又た指樣を同書に載て、五節童女の頭に物着付ると二所に之を付左は耳に上ほど右は頗る後に寄て之を付其故は差櫛を用ゆる時は此物着の上に横さまに差なり云々まさすけ裝束抄に、當日はさしぐしといふものを右の物着のかしらに横さまにさすなり云々此書に因ときは昔の童女は二枚の櫛を以て今云横櫛の如くさしたるが如し是より金、銀、玳瑁等の櫛行はれて莫大の金を費すもの少なからず天和のころ白目ぶちのさし櫛、べつかふの惣すかしのさし櫛流行せり（彫工東雨安親は奈良辰政が弟子にて出藍の譽あり安親が女子に彫て與へたる透しの櫛あり眞鍮にて形角なりみねの所狹く齒長し面に水仙の折花をすかしに造たり）其後はやれるは齒のところ玳瑁水牛にてたけ短く面を廣くして銀の覆輪いろ／＼の摸樣を透しに造りたり元祿に及びては庵形と云るさし櫛流行享保には角櫛を用ゆ米仲が獨吟歌仙に、關の地藏を唱にゆりすて角櫛を下駄の齒

など〻さみせられ云々然るに寛保三年亥四月廿八日町觸に、女子の櫛笄に金銀のかなもの高蒔繪等致し前々は無之簪し櫛押へなど〻名付拵へいたし不屆に候向後櫛笄古の小形を可用云々此觸出てより一時黄楊櫛のみになりしが寶暦のころ朱塗山形の平たく横長きを指に至れり安永に菅原櫛とて流行せり是は平賀源内と云へる小説家の作り出せしものにて此櫛につき或人狂歌を贈りける、醉てきて小間物見世のお手際は仕出の櫛もはやる筈なり、返し、か〻るとき何とせん里の駒物や伯樂もなし小づかひもなし、などあり其他種々の流行ありしなるべしと雖ども未だ見當らざるを以て余が卑見のみを記せり他は江湖識者の教を俟て再度陳るとあるべし。

○東西の繪畫

八木駿辰

凡繪は和漢西洋とも皆宇宙間の天造人爲を彼れに取てこ〻に寫す故に其極に至ては實景景物を以て摸範となすより外なかるべし其本原同一素より彼是の別なきなり然るに自家の流派を是として忘りに他の畫風を非とするは鄙陋狹小の評論にして管見の譏を免ぬかれず今西洋畫と和畫に就て言ふときは洋畫家は和畫を指て曰く和畫は不規則なり試に見よ山水を見れば遠近向背の距離に法なく各物實様に異り洋畫の如きは然らず尤も規律正しく遠近向背陰陽凸凹悉く道理にかない動物植物に至ても其骨格性色皆實理に適し理學化學によりて一景一物更に實事を失なふ事なしと則に然り然れども吾が日本國は大政一新前五六十年以來一新後七八年の和畫を以て今日の洋畫に比較して論ずべからず何となれば和畫にても古人は今日の如く理學化學の據るべきも或は實物に就き又は實景を寫し古書に就て實事を推究め趣を探り意を求め千辛萬苦終に其蘊奥を極む故に筆の至らざる處ろに氣あり似ざるところに妙あり神品と評し妙品といふも即ち是が爲なり一新前後に至ては吾國の畫風大に衰へ狩野土佐圓山流の畫最も勢を失ない獨り文人畫の稍や文人社會に行なはる〻と雖も其針路の洒落淡泊に向ひたるより卒に輕薄浮滑に陷り眞正の畫道愈よ遠く筆の至らざるところ意も至らず似ざるものいよ〻似ず如此きは之固より流派の罪に非らず世の風潮と其人の學ぶところ淺き故なり洋畫の如きは之に異り司馬江漢創めて吾國に端を開きしより近年に至るまで深く其の道に從事し其勢力を有するもの太た稀なり明治以來海外の文物日を逐て盛なるとともに繪畫も亦た今日の隆盛に至れり今和畫の衰へたるを以て洋畫の盛なるに比すれば恰も草木の春秋の如し一は日々に榮へ一は日々衰ふ是れ亦た流派の罪に非ずして時勢の然らしむるなり然れども其の衰へたるものも明治十六七年以來聊か挽回の勢を顯し今日に至て大に其の面目を改めたりといふべし如此にして止まざれば則ち古の法を支那に取て却て日本一派の妙趣を現したるが如く又法を西洋に取て一大日本妙畫を現出するも知る可からず洋畫の如きも悉く實事實物の眞寫に違ふなしといふ可からず譬へば今﨑を畫かんに其實物實事は何に據て畫がかん哉又吾國古來の戰場の有様を畫くも其陣法なり戰況なり地理なり何を以て眞を知らん（軍學家へ日本古流）に問はんか果して其實を得がたかるべし史傳に依らんか詳かならざるべし然らば則ち無形上より理會し來るの外なかるべし江漢曰く和漢の畫は酒興の一興戲弄戲技なりと或曰く本邦繪畫工藝品の輸出は其美術を喜びて之を求むるに非ず其異様なるを以て外國の奇人好事家の取るところにて一人一個の好に投ずと余謂ふに然らず先年獨逸國に於て萬國金工博覽會の時に當り吾國の美術を以て奨譽を萬國に耀かし又日光山の染木の戶を外國人の請て止まざる所以（繪畫講義第三）は皆其物躰の超絶非凡にして彫刻も之に協ふによる加之近來輸出の畫を英米に於て評する所を聞くに羅漢仙人等の畫を除くの外は異様奇態を以て一人一個の好事嗜好に投ずるものに非ず位置諸般に至るまで吾國に於て賞するところ彼國にても亦上等に評く若し一人一個の好事に係るものとせば豈に今日輸出する如く多數を要せんや試に見よ彼國より舶來するゴム人形尤も異様なるもの之を求むる者幾人かある彼國と吾國と風俗人情多少相違あるもいかで奇人好事のかく輸出品を要する程澤山ある事あらんや今日の和畫も短を捨て長を取り駸々乎として止まざれば前代未曾有の法を得て萬國無雙の妙畫を現出するも知るべからず洋畫も亦然り朝の春色は夕の秋色となり昨日の開花は今日の殘花と變じ天造も作爲に化し爲も呼ぶべく蝶も引くべし恰も三四十年以前吾國俚部人の神天の怒とか魔法とか稱したる電氣や蒸氣の効用を今日に見る如く畫上にも又フランクリンやワットの出るも知るべからず文物の開化は昨日の不可思議も今日の常となり人智の進歩は人智を以て測りがたし故に今日の吾輩も明日は三四十年以前の俚部たるも亦知るべからず和畫を學ぶもの其方針を正し駸々として極妙に達せん事を企望するなり。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

史傳

○マダム、ローランド、とカンチット姉妹の交

紫　愛　散　士

マダム、ローランドが尙ほマノン、フリフオンと呼びなして或る寺院に在りける頃既に虔敬の念篤く學問の志深く遊戯の時さへ尙讀書と默念に費やし自づと世の人に異なる處ありしより共に語ふ友もなく心淋しく思ひし折幸にもカンチットと名づく二人の姉妹に逢ひ最と睦じき交となり朋陪の羨み妬む程となれり其姉の方をヘンリーッタと云ひ時に年十八歲にして妹をソフィと呼び僅か十四歲の小女にて最もマノンの意を得し友と云ふ其後一年を經てマノン、フリフオンは寺院を去るの都合となりカンチット姉妹と袖を分ちしがソフィを愛するの情堪難く數々訪問して共に語らひ又時に書を寄せて思を述べ居たりしに次で二人の姉妹も其寺院を退きしかば愈會ふことの任意ならぬ中となり想ひ根の絕へ間なく每週一度乃至二度の書信を往復し僅かに胸中の萬一を盡せしとぞ今一二の例を擧げて互の交の情態を示さんにマノンの母不圖病に犯れて俄かに墓なくなりしよりマノンは悲嘆の極に餘りて劇き熱病となり聲も立ち得で最と篤く見へける時ソフィより書信を得て

「ア、ソフィより……我が友の聲が……柔なる聲――我精神を起す……我心を和ぐ　藥石效なき……我が命　今生き上りたり　サッパリ變りた　オヽ我聲は出ぬ　アヽ嬉し　我れ救はれたり……　と申したりとぞ其裡如何なることの書しありしや伺ひ知るなしといへ將さに死なんとせし人を呼び起せしと思へば思ふに友愛の情火を以て温めしならんか又これを見て忽ちに氣を得たるマノンが友情の熱き亦以て其心中に在る凡ての情よりも最も强かりしを見るべし。

又或る時待ちに待ちたるソフィの手狀到着せし時丁度午飯時分にて家族共に打揃ひ食卓に列り居たりしがマノンは喜び封押開きて中讀み忽ち家族の列あれるをも忘れハラと涕を落せしに祖母はこれを見て斯く熱き友情も人に嫁し子を持ちなば忽ちに消ゆるものなりと云ひしにマノンは直ちに書をソフィに寄て「世人が友達の情誼を以て甚た輕き者と思ひ候は實に驚き入申候然れば彼等が僅かの情義の爲め外界の爲めに其交を棄るは素と其心に根なきに依ることゝ存候シテ我等が情誼は此の如く外界の變化と共に變化するものと君は思ひ玉ふかと申し遣はせしもローランドに嫁するの後幾分か其趣を異にせしを見れば曾ては斯くと覺悟するものゝ其塲に至りては中々

難き事なるべし致し方なき次第なり。

先哲の云へるには友人は第二の我なりと實に眞正の友情を穿てる言葉なり余は今これをマノン、フリアオンとソフイの間に見るを得たりしが更に又マダム、ローランド（當時既にローランドに嫁し其名を改めたり）とヘンリーックの間に見るを得る。

彼のマダム、ローランドが佛國革命の時に際してヂロッチン黨の一人となり斷頭場裡の霜と消へなん前宵ヘンリーックは言葉を盡し心膽を吐きてマダム、ローランドに脫檻を勸め身自らローランドの衣を被り代りて獄に止まらんと迫りしにローランドは然れば御身は殺され玉ふべしとのみ答へ少しも承知せずヘンリーックが淚と祈にも動かざれば明日は愈別れかと互に抱き泣きしと云ふ己か身を殺してさへ尙其友を助けんとす其志誠に美しき限にして實にマダム、ローランドは三人の我を持ちしと云ふべきか。

○叡覽短歌

駿州沼津　須郷てい子投

天保二卯年吾御勘定奉行内藤隼人正家來横山平馬妻みち卯三十三才右みち儀伊達紀伊守家中侍前子師木間徹清さ申者歌道をも心掛候に付弟子さ相成修行罷在候當春中近衞殿御内佐竹甲斐守と申者之甲斐守弟橋屋六郎を以甲斐守えみち詠歌數首見せ候處近衞殿方ゟ參御相夫方傳奏御相夫方和歌御師範之御相夫より帝上之入　叡覽に

月前落葉

あかぬかな月すむ夜半（空）にちる紅葉かつらの花の心ちのみして

此歌　御感有て夜半を空と御添削にて宣命被下みち名代近衞殿御内仙石内蔵介室相勤候於日野家戒兵衞尼家へ相廻り關白殿へも參殿三日朝六時　御前を拜し天盃頂戴御式相濟即刻歌道祝といふ御出題にて當座

八雲たつ出雲八重垣わけしよりたへす久しき道そこのみち　桂子

さ相認入　叡覽これは冷泉爲則卿御代詠なり

宣命左之通

宣命　大高檀紙認

大和歌之有道
感桂子宣命散
位女位叙候所
任如件
天保二卯年五月三日

右中辨源隆光判
大村桂子殿

冷泉爲則卿富小路政直卿祝御歌

東のみち子か桂の花さよみつるをすへらきのめてさせかつら子さ名つけ玉へるな

位山猶かけたかくさーいて〻あまねくてらせ月の桂子　權中納言藤原爲則

もゝしきの大内山にてる月の猶かけみかけ玉の書の葉　左衞門督政直

てる月のかつらをなりてみかきなす玉のみはしにのほりしや君　近衞殿御息女

今よりは光りそはん中空の月にみかける玉のよこ山

寄書

拜啓貴社益御精榮奉大賀候。偖て近來女子教育の盛なる。都村至る所に。大に見る所を得るに至りしは。全く貴社が御盡力。預りて其の功ありと申すべく。付ては道岡。小生が至て。拙文なるも顧みず。以て貴社に投じ。餘白を汚すの榮を得たき次第と申すは。小生が一度東京を去り。漫遊の途に上り。彼處に一ヶ月。此處に二ヶ月と。滯在中。或は目擊し。或は父老に聞き。近來女子教育の盛なるに伴れ。一の弊風とも申すべき點。東京なぞに於ては。餘り種々の刺

際なぞある故か。見受けざれども。田舍に於ては。其の弊頗る著しく。之を深く考ふれば。亦た忽諸に付すべきにあらずと存じ。大に憂慮罷在り候處。幸ひにも貴社發兌之女學雜誌。其の名に負かず。版路至て廣く田舍に於て。女子の見るべき雜誌と一云へば。殆んど貴社發兌の貴紙に限ると申すべく。從て其の勢力も大なれば。大膽にも。拙文なるにも驚かず。聊か貴紙の餘白を汚し。世の婦女子の。參考に供せんと欲し。寄書仕る次第なれば。希くは何卒十分に斧鉞を加へられ。掲載の榮を賜はらば。何の大幸か之れに加くものなく。依て此段奉願候也

○一片の老婆心

上毛前橋　佐和鋼太郎

方今開明の盛運に際し。人智日に進み。工藝月に旺なるの時。此の時に當り。有爲活潑にして。未來を繼續する。多望なる青年諸は。已に都下に輻輳してのみも。孜々汲々として。文明的の教育に從事するもの。其數幾萬なるを知らず。嗚呼盛也と謂つべし矣。今夫れ日進月新なる。今日の時勢に當り。獨り大丈夫たる者のみ。專務するの時なる乎。豈夫れ然らんや。未來之救世主なる青年が。今日夙夜孜勤努力するなるに。未來互に手を携へ。室を同ふし。共に新日本の社會に立ち。共に拮据經營すへき淑女たるものが。尙ほ深窓の佳人を氣取り。安閑として坐視するの時ならんや。豈其不均進度を失して。偏進するの時ならんや。是を以て。方今女子教育の盛んなる。都村至る所に學校の設立。日を逐ふて増加するあり。或は雜誌の發行を見。或は協會を起すありて。以て熱心に此の道に謀らるゝは。是れ豈國家の爲めに。一大白を布き祝賀せざるを得んや。嗚呼亦盛なりと謂つべき哉。然れども余輩聊か茲に一の憂ふべき事あり。何ぞや。他なし。大凡物大利あれば。之れに伴ふて。弊害の生出するは。蓋し理數の免かれ難き所ならん歟。去らば近來銳意以て女子の教育に謀られ。大に見る所を得るに至りしは。蓋し何人と雖も。異論を試みるものなかるべし矣。可は即ち可なりと雖も。退て自之生ずるの弊害に至ては。全く勢の已むを得ず。或は一種の人より見れば。瑣々たる一小事。否な當然の一小事。何んぞ論ずるに足らんと云はん歟。なれども余輩の黑眼を以てすれば。聊か余輩をして。閉口せしむるものあり。乞ふ少しく之れを說かん。

試みに見よ。卿等の身邊を注視せよ。社會の眼光は。果して文明的の眼力と。將た尙ほ封建的の眼力とを以て。卿等に注目するの度合は。孰れか强大なる力を有するかを。約言すれば。卿等が處世上に對し。萬事都合宜しきや否を。蓋し社會の大半は。文明の空氣に沐浴し。全然封建時代の思想を以て。批評を爲さゞるにせよ。尙ほ惜らくは。卿等が言行にして。少しく異樣なるを見ば。忽ち傾斜して。封建時代の思想と化し。隨分邪推交りの批評を喋り易き時にあらずや。吁亦危險なる哉。去らば其の局に當る婦人は。宜しく反顧以て注意して可なるべし。然るに社會が如斯き位地なるにも拘はらず。熟らく今日少しく教育あり。才智ありと思ふ。妙齡なる婦女子を見るに。殆んど世の批評如何には。少しも注意せざるものゝ如く。否な寧ろ夢中に存し。中には少しく學問を受け。教育ある女子は。烏なき里の蝙蝠を學び。今日の世より見る時は。往々女子に似合しからぬ口調を吐き。或は女子の活潑を誤解して。所謂女の生意氣と過ぎ。或は御轉婆に流れ。輕薄に傾き。況んや從來よりの惰性に。少しく教育を混合し。一種不可思議の出過を生出し。若し夫れ男子と相接し。共に談話すれば。リーダーの一卷か。バーレーの一册も詰めは。忽ち英學者を氣取り。折に觸れ英語を挾み。傲然自惚の狀を見はすものあり。此れ都下には。餘まり見受けざる所なれど。田舍には往々發見し。一驚を喫することあり。時に或は最市の本分を顧みず。「ピヤノ、ヲルガン」を知らざれば。以て今日の婦人たらずと心得へ。徒らに貴重余計の時間を費し。「トランプ」を知らざれば。是れ亦た文明婦人の仲間外れと心得へ。「アタラ貴重の時間を空過して。專一に耽り。或は排說の忠言を。柳に受け。以て小說と非常の親密となり。或は好んで異樣の風をなし。時に或は人をして下等娼妓と疑はしむることありて。人をして一見奇異の思をなさしめ。世の老成人をして。竊かに杞憂を抱かしめ。否な吾人と雖も厭惡の念を生ずることあり。況んや封建時代の空氣を。呼吸したる人をや。若し夫れ世の杞憂家の念を推し。之れを考ふれば。あの優美なる惰性。今ま何許にある。あの温和なる淑德。夫れ安くにかある。あの親切慈悲の心。何くにか見ゆる。此れを思へば。彼を思へば。轉々慨然たらずんばあらず。嗟少しく教育學問を受ければ。斯くも婦人は成るものかなと」。守舊家は申すに不及。一般世人をして。慨さして憎惡の念をなさしむるは。是れ豈女子の本色ならんや。此れ今日婦人教育社會の。餘弊にあらずして。抑も何ぞや。

余輩は豈徒らに卿等の缺點を求め。之を世上に鳴らすものならんや。古語に云はずや。聖人は世と推し移ると。卿等今日の社會を熟考せよ。或は思ひ半ばに過ぎん。故に社會と共に處するは。此れ亦處世の一法にあらずや。(但しジャンダアーク、其の人の如きは元より此の限りにあらず)去らば卿等が。如斯社會より見らるゝも。要するに卿等が。不完全なる社會に立ち完全を望むの罪なり。夫れ日本社會は。未だ歐米の如き。樂土に至らざれば。不完全なるは。元より其の所なり。然るに今ま若し强ひて。完全を望まんか。此少しく無理の注文と謂はざるを得ず。恐らくは卿等の頭上に。思はざるの失望と。失敗の來らんことを。幸に卿等が望む。圓滿なる境遇は。累々として。目前に横はり。欣然として。卿等を歡迎しつゝあれば。能く其の經路を歩し。大早計に突進して。以て無根妄說を招き。世の譏口を引くこと勿れ。能く今日の時勢を咀嚼玩味して。卿等が天賦の惰性と。德行とを隱すことなく。卿等が正に有すへき身分と。位地とを誤まらず。以て社會の潮流に。棹されんことを。切に希望に堪へざる也。余輩之を憂ふ既に久矣。今幸ひに女學雜誌記者の。允準を得て。以て餘白を汚し。世の婦女子諸君に質さん爲め。敢て一片の老婆心を。永くしく云爾。

小說

○母猿一叫

蓬矢子作

聖堂の森高からず神田川の水も亦深からず森を凌ぎ川に望んで立たる西洋風の二階造り○○校は表札墨黑々さめ門內小松の色濃きに及ず空を馳る晝鳶の聲も遊歩塲に遊ぶ小兒の唱歌に劣るチャン〳〵〳〵と鳴る鈴と共にがた〳〵どた〳〵と廊下を馳走す生徒の足音は靜かになさいといふ教師の聲を踏消して一時にドット遊歩塲に散る中に年も十一二にやあらんが唯一人粗末の着物きて楓の樹に倚り懸りながら友達の遊ぶを眺む少し離れて八九人の娘順番にゴム鞠をつきながらナンと大きな子ではないかといへばほんとに變なと口を出すまあ幾歳でしようといふは己れの割合に年の若きを傲る小娘あんな見惡ひ着物服てと嘲るは八丈の振袖に紫繻子の袴はいた令孃中に賢しげ一人が氣の毒だから一所に仲間に入れてやらうといへば四方から飛んで出る打消。

僅か十分か廿分で就業時間の鈴鳴渡れば今迄何處へ散りしか分らぬも汗をふき〳〵列を作て教塲に入る石板と石筆を出してといへば大嫌の算術だよと小言云ひながらがた〳〵ぴしやんと蓋を明るは十八の內九人昨日の宿題は誰れか出來ました

か出來た人は手を上て誰れも出來ませんかそれじや萩野さん此へ出て說明をなさいと云はれた生徒は先きに獨り楓の木に倚りかゝつて居た娘說明の內は皆んな眼を丸くして間違を日付けようとは言合されねど皆同じ先生は說明の宜きに感服してよろしいと云へば今迄擴げたる駿河半紙の帳面を閉て片頰に笑を含みながらやをら坐に付く。

セコンドの音は命を刻むが如し一秒〳〵は我をして冥途の出達を急がしむと惡口云はれても時計は知らぬ顏して一日一月と計る今日は卒業式とて何時になく講堂には幔幕など打廻し正面には黑檀の机に白き綾あるテーブル掛を懸く平常事務室の片隅に厄介物になつてをる花瓶も今日計りは美麗な花を挿嵌まれて獨り机の上に威張る小學全科卒業生萩野露と第一番に呼ばれて椅子を離れしは楓の娘二番に呼ばれて席を立ちしは八丈の振袖着た娘父親は當時勢よき外務の秘書官なる上島某殿にて御名は高子。

お露さん御待なさいほんとにあなたの御勉強には畏れ入りますよ私しも今度の試驗などは餘程前から氣に掛ていましたがどうしても叶ひませんナニお高さん私しのはほんに怪我の功名ですよイーヱあなた謙遜ばつかりあなたの日本歷史の答案

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

には拜見して驚きました私しなどは中々及びませんそれはそうと今日は是非私しの家へ入らつしやいあなたの御母さんには御話し申して置きましたからさー早く御露の父は長州の藩士にて文武の心懸厚く伏見の戰爭に一手の隊將を命ぜられしが運つたなく討死せし由又上島といふ人も昔は同僚にて仲宜かりし由御露の話しは幸福の糸口を引て母子諸共貴顯の宅へ迎へられぬ御露親子は今は昔に似ず上島氏の慈愛にて高子と同じ學校に行く身とはなりぬ世の中に何にが早ひと云はゝ草艸紙程早く又遲きものはなかるべし一分の出來事も三四十枚に餘り百年の出來事も一行に滿るに足らずお露は十九お高は十七といふ年二人ながら高等女學校を目出度卒業した二人ながら卒業の論文は或る雜誌に乘せられて盡く讚美せられぬ少し風が暖かければ今迄堅く凍り付ていた氷も上面丈融け緩しく閉こめた蕾も少しは色を出すならひ二娘の顏容の事申す迄もなし秋の氣の涼しきにも捉れず軟き細き枝を延して咲く野邊の女郎花春の暖さに蕾を割て笑を送る吉野山の櫻花何れも愚はあらじ己が御出入の家の二人の御孃さんの美しさ此間講釋で聞いた楊貴妃とやらいふ唐の別品の寫眞があるならばお孃さんと比較て見たいとは湯屋で植木屋の言語されば諸方よりの縁談は夏の夕立もなんかうの今時の女はこれで安心してはいかんお露さんも高も一奮發して大平洋でも越して來ひと父親の慈愛お露の母は嬉し泣の内にも一人娘を遠くへやる悲しさそれよりは上島一家は毎日大騷動呉服屋小間物屋又は洋服屋は詰切り受給わりますれば御當家の御令孃御二方には近々御洋行との事陰ながら嬉しく又目出度御祝申します附ましては御乘船の切符又は荷物等は誤失の無いやうに働きますれば何卒御用を仰られ下され度願上ますとは横濱の滊船問屋の手代何某さても速ひ事あの縞は柄がいゝけれど色があんまり惡ひ此の方がまだいゝお露さんあなたはどちらが宜の私しはどちらでも宜う御座ひますアラツー遠慮なさらずと御言ひなんでも二人御對にこしらへて行くんですからとは呉服屋を前に置て二人の問答丸や早く定吉に言付て馬車を仕度させて御來れ銀座のあすこへコーセットと襟飾りを買に行くのだから早くさ御孃さま仕度が出來ましたそうかいさー御一處にまいりましようと手を取あつて馬車に乘移れば御者は一鞭あてゝ御前向へ行くと向ふの人が何卒日本服を着て見せて來れろと頼むそうだから邪魔でも是を一襲持て御出お露御前もそうあさいとは荷物を行李に積込む時に二人の母親の心配なにも積

殘しはないかへあの此間○○さんから餞別に頂た手巾もはいつてありますかハイそーかいそれなら古今集はあれは私しの小さな行李の方へそーかいなんしろ忘れ者の無い樣にをしとは思へば母親ほど有難きものはなし御主人の職掌が職掌だけに海外旅行劵も思の外早く渡り愈明日午後四時チシヤニツク號を以て出帆と聞いて二人の母親は今更の樣に嬉しくもあり又悲しくもありやるは娘が修行なればと思ひ返せど三年と五年と愛娘を何千里と隔たる地にやるはつらし最早や用事もなければとて手傳に來りし者などには酒肴など與へて宵より寐かしぬ夜は未だ更ぬなれど今日は昨日と異なりて微なる聲音も能く響く御前愈々明日は出達だとね私しの云ふ迄もないが無理な勉强をせず身躰を丈夫にして病に掛らぬ樣にして御くれお露さんは御前より年上だから能く物事を相談してからなさいまし又あつちへ到たら直ぐと電報を打てをよこし云ふ事は數多さんあるが皆んな御前の知つてる事だから別段云はあいが呉れ〳〵も身躰を大事にしてをくれ萩野母子が部屋では閑談殊にしめやかなり燈の光り淡くして僅かに二人が影を障子に寫す御前明日は愈々亞米利加とやらへ向て出立するとね母が申す迄もありませんが此の御主人が沒くなつた私か連合と御懇意の間柄だとて御前のみか私まで御引取被下それからといふものは御自分の御娘子と同樣に一から十迄の厚い御世話猶此の度は學問修業の爲めに遊ひアメリカとやらへやつて下さるとの事聞けばどんなに儉約しても一年に千圓は入ると人の噂海とも山とも譬へ樣のない御恩決して忘れてはなりません又高子さんを姉とも妹とも思て御世話をなさい病氣などにはかまへてあつて下さるな向ふへ到てからは怠りなく手紙を御出しなさい御母さんは御前より外に賴る人もなしいふも愚痴と笑ふか知らないが連合が伏見で御討死遊してからたれとて振向もせず又子供とても御前獨り隨分苦勞に苦勞を凌ひで來たのです今こそこうやつて樂の樣なものゝ昔はと鼻をつまらせながら言來りしが俄に咳を強くすればお露は馳寄てお母さん湯をと差出す手首を取へて……落るは雫か。

一時が鳴り二時が響き三時が打ち兎角する内四時を知り最早夜の明るにも間もあらじと起返れば雨戸を繰る音耳に響く今日は首途の日とて上島一家は取分け大騒ぎ二人の母親も濱まで送らば却て涙の種と思切て玄關で何うぞ丈夫で便よりを度〳〵ハイ御母さんにも身躰を御太切に御機嫌能と跡は口の内證生下女下男が左樣ならの聲勇ましけれど二人の娘二人の母親

の心如何ありけん書分るに山なきを怨む新橋は二嬢の知巳を以て埋る計り御機嫌能何卒日出度御修業遊ばして御歸朝の日を御待申します船中御氣をお付けなさい向へ到着なさりましたら早速宿所を御報知下さいと入替り立替り口々に云ふも二人は常におく顔赤らめて兎角の返事もなく唯頭を下ると握手するのみなりし漸て滊車に乗移ると同時に送行者の餞別にや洋々と音響く音樂と共に夥多の玉を轉ず聲音。

友よ〳〵。書讀む友よ。螢に雪に。睦みし袖を。今こそ分め。いざや〳〵。いざさらば。

と琴歌の譜に合して節面白く唱へたり今少しと思ふに滊車は無常にも煙を吐きて奔り初めたり窓より振る二の手巾此方には拍手喝采の音。

昨日だつたと思ふに最う今日は十五日目大抵十五日か十六日目には桑港とやらへ着くその書生の話船の塩梅はどうだつたか知らん四月五月は航海が一番安いと兼て聞て居けれどもその上幼少ひ時から躰操が好きで此間も横濱から清水に行た時に私しなどは酔て目迷のするのにお露さんと甲板の上で高咄しおんしろ一日や二日なら我慢もするだらうがそれにお露さんはお弱ひ方だからとはいふものゝ十五十五と其日を繋く長航海昨日も大層な雨降りだつたが船は荒れは知なかつたか知らんまあ早く着て電報を打てばいゝあれほど堅く言てをいたから向ふへ着たら直に打つだらうがそれとも未だ滊船がつかないのか知らんおんにしても心配の事と思ひは同じお露の母徐かに襖を明けて互に席に付きし時玄關の書生が慌しく奥さま但今電報がエーッ

ブヂ　トウチヤク　アンシン　アレ　（詩切）

新報

○清人花を移さんとす

條約改正の可否に付きては吾人今ま之を論ぜず、然れども吾人が甚だしく之を賛成すると同時に尤も畏ふるところのものは風俗の之より悪化する所ろあらんとを掛念するにあり、蓋し移住殖民は主も不道徳の人間にして其品行に頓着せざるものなれば、其散じて自由に内地雑居するは悪元を散布するに均し、之れ先づ注意せざる可らざるもの也、「日本」は既に右類似の如き一報を傳へて曰く、

花とても牡丹に非ず海棠に非ず曲眉豐頬の物言ふ花なり濱港に淸人あり姓を丁と云ひ名を茂易と云ふ骨董を業とす元と厦門港妓館の主人なり近頃ろ條約改正内地雑居の風説頻りなるや此に思ひ付き雑居許可の上は一大妓楼を濱港に築き正直正銘の越女又呉姫を蓄へ盛んに洛陽年少を溺惑せしめんとの計畫ありと。

今の論者改正后の風俗に付きて注意せず、然れども是れ亦た大ひに憂慮せざる可らざるもの也。

○世上忙々、異個漫遊

福澤諭吉氏は此頃漫遊せらるゝ由なり、九月十八日の時事新報に云く、

先生は近年リヤウマチスの宿痾あり時に或は地を換へて加養せんと思ひ居たる折柄令嬢令息は此秋期に乗じて大和巡りの遊心あり爾方意氣投じて一家忽ち相談纏まり最初は滊車にて東海道を下り名古屋より折れて伊勢參宮を濟し夫より所々の山水を訪ふて終に須磨に至り歸途は神戸より船に搭るの豫算なりしも暴

風雨の爲めに妨げられて往くを船とし還るを車とーして一昨朝東京を發し家內一同相携へて横濱より薩摩丸に搭じ先づ神戸に向ひたり右の次第にて今回は眞の漫遊なり殊には婦人小供連にて旅中の訪問は一切謝絶すると云ふ。必らずしも時事に冷なるに非ざ、吾人は今の論客に向つて亦此の樂しみあらんとを勸告す。

○支那婦女收養局

清國にて飢饉水災の不幸に陷りたる地方人民の難澁する有樣は實に名狀し難き程にて上海邊の有志者は外人の力を借り屢々貧民を救助せしが兎に角男子は短腕ながらも他に出で生活の途を求めて僅に口を糊するを得れども跡に殘れる老幼婦女は生活する能はざれば之を救助收養する爲め收養局を設くるの主意書十箇條を得たれば左に其主意書の大要を記すべし、

一、曉諭を守るべき事、一般災民は極て不安の情狀なれば務て四方に掲示して新に婦女收養局を起し以て便宜に提携招來せしめ遠近の粥廠(救助小屋)をして均しく之を扶持し以て本局に赴く途中婁子に逢ふ時は直にそれを介抱して共に相養ふの義務ありとす。

二、分局を設くべき事、各要地に於ては分局、支廠を設け(粥廠を統るに分局あり分局は總局を以て管す)隨て來り隨て養ひ百人に滿れば支廠に移し老父病夫と雖とも共に來るものは分局に留養し又は一家五六の婦女あれば同居せしむ但し乞丐女等は一切入るを禁す。

三、雜費を省くべき事、內外の義捐を仰ぐは止むを得ざるに出づ素より少しく足るものには決して此貴重なる生命の錢を與ふべからず且總局は一切出納簿を整頓し一人は銀章掛一人は檢査掛一人は分局を擔當し一人は地方往復掛り一人は粥廠給助掛り一人は實力實心を主とーして臨時に其狀況を上海天津の協賑公所に報告する等なり。

四、來歷を明にすべき事、婦女局に至れば自己の名氏、原籍、年齢を報ずる外に其父夫、兄弟、叔伯の姓名より身分、職業又は親族、離散するもの等を登記し以て訪問の便に供する爲めに各處廠局の門首に各婦女の名を掲げて往來の人に示めす。

五、廉恥を重ずべき事、名門貴族の上等人と云へども今日は口を糊するに窮して來るものは特別に憐愍を分つて半月づゝの糧を給し又た稱子あれば共に之れを教護すべし。

六、水土を調ふべき事、今日病み且死するは米麥を採むに暇なくして加ふるに草根木皮を食ひ宿滯消失せざる故に先づ食鹽少し許を用ひて滯を解き飲ましむるに米湯を以てする上漸く薄粥を與ふる、日に兩度と爲して俄に腹一盃に過ぎざるやう注意せしむ。

七、生業を營むべき事、收養の後健全に復したる婦人の爲めに賃仕事又は他に傭工を試みるも式の如く帳簿に明記し及其內五名を舉げて本廠の用に充つ但し少年婦女は門外に出づるを禁じて針線の事に從はしむ

八、配合を擇むべき事、元來婦女を收容するの談に至りては太だ難しと云ふべし就ては本局に於て婦の夫男あるか何人に嫁するか若し既に寡婦なれば其意志等を視して探ぐるともあり又紳士が代て少女を其家に嫁娶すれば委細の事情を申出べし

九、路費を與ふべき事、退局せしむる場合には其原籍地方官に通知し保甲の證印を受取りて父夫の來り承認する上は直ちに同人を引渡して路費を給し又は再び一箇月の扶持を與ふるとあり

十、拐帶を防くべき事、每々拐帶の沙汰尠なからず爲めに地方官より嚴重に諭達して婦女の境を出るものあれば何處の何誰に赴く等の質證を認めたる上に旅券を附すると若し沿道客商は婦女を拐帶して其證なきものは取押へるとあるべし尤も本廠局に於ては日夜交るべく係員をして門內外を巡視せしめ形迹の疑ふべきは之れを詰問するとあり

(九月十八日時事新報)

之れ清國に於ては注意すべき政策なりと云へども、彼の國に於ける法文上の良政は古來すべて多く之れあり、只だ其實際の然らざるを歎ず。

○萬國平和協會

米國ニウヨーク府に於て去月其第二十三年會を開き、左の如く決言したり、戰爭ことに歐洲に在るが如き戰爭的制度には多くの重大なる害惡あり、家を亂し、人總中の不清潔を養ひ、婦女を孤寡にし、且つ婦女子を種々の危難に際會せしむ、故にいよく今日の制度に對しても反對せざる可らずと云ふ也。

○萬國禁酒會議

佛國大博覽會に際し、萬國酒毒研究會議(International Conferens for the study of questions relative to alcoholism.) あり、去八月初め其第一回を催うしたるものゝ報告を見るに、會頭レヲン、セー氏開會の辭ばを述べ、第一議題(統計＝各國酒店比較、飲酒罪惡比較。立法＝酒店制禁及其害惡防止法方)に對し、裁判所統計官エー、イベルチス氏の答によれば、

歐洲各國に於て酒毒罪惡の相ひ關係するは極めて明白なり、佛國にて千八百七十四年には酒店三十四萬二千九百八十軒ありしが千八百八十五年には三十九萬五千七百〇三軒となりたり、此の十二年間に酒店の增したると即はち一割五分なり左ればにや千八百七十四年には酒店一軒に付人民九十二人の割なりしが千八百八十六年には九十人となりたり、又パリスにては酒店二萬六千軒あり即はち人民八十八人に付一軒あるなり、斯て罪惡の增加莫大にて發狂院入院者のみにて十四年間に一萬五千三百二十二人を增したり云々。

又第二項に對するは、

先づ妓樓を減ずるに在りと云ふ說ありしが、ブラッセルのエム、カウデルソーア氏は凡そ酒に耽るものは酒店の距離多少によりて其慾を減ずると少なし和關

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

國にて左様の望みを起し住民百二十五人に付き酒店一軒の割りに制したれども以來何の効もなかりきと、之に反對する說賛成する說種々と起りぬ、而して種々の討論の後ち、左の如く決議したり、

當會はアルコール消費の增加は罪惡、自殺、狂氣の主なる元因の一なりと認定し、又酒店を減するはアルコール消費の高を減するに効ある法方中の一なりと信ずるを以て、政府に右制減の政策を執らんことを勸告す。

○第二レビット夫人來らんとす

彼の久しく相待たるアッケルマン孃は、サンドウイッチ、ニユウゼーランド、タスマニア、オーストラリア、セドチーを經て來十一月上旬我國に來られ諸府縣を巡回して禁酒事業の擴張を計らるゝに付前以て其準備等を海岸女學校のスペンサー孃までセドチーの巡回地より依賴し來りたる旨、眞理之友に見ゆ。

片ゝ

○華族女學校行啓　皇后陛下去廿五日午前九時頃御出門にて赤坂門内なる華族女學校へ臨ませられ親しく授業の樣を御覽遊され三時過ぎ還啓仰出されたり。

○皇女常宮殿下の御歸京　常宮殿下には去る二十三日十二時三十分上野着の滊車にて伊香保より御歸京あらせられたり。

○有栖川故績子女王の三年祭　來る三十日は有栖川故績子女王の三週年相當に付豐島岡に於て其祭典を執行するよし。

○婦人科の設置　東京慈惠醫院にては今度米國費府女子醫學校を卒業せしドクトル岡見ケイ子を主任とし本多セン子を助手として婦人科を設置せり。

○一ツ橋幼稚園　一ツ橋小學校々主多田房之助氏が發起にて神田一ツ橋通町に設立せし私立一ツ橋幼稚園は去る十五日より開園し四年以上六年未滿の幼兒を入園せしめ監督は園主の外雙に東京女子師範學校を卒業し其後府縣師範學校幼稚園等に從事せし佐竹女史に依囑し保姆は保姆講習科を卒業し斯道に熟達者の二名を助手一名を置き保育せしむる由なり。

○婦人慈善會幹事會　去る十八日午後三時より東京慈惠醫院に於て第五回婦人慈善會の幹事會を開き三條、鍋島公爵夫人、黑田大隈寺島の三伯爵夫人、土方、吉田大村の三子爵夫人等臨席し畢て同院の各病室を巡覽ありし。

○佛教家慈善會　何禮之、大内青巒等の諸氏が發起にて各府縣水難者救恤の爲め佛教各宗僧侶並に有志の學士等に依賴し近々數日間の佛教大演說會を開き慈善傍聽券を賣捌き所得の金額を施與に供する由奇特の事と云ふべし。

○婦人衛生會　大日本婦人衛生會員一百餘人は長與專齋氏の紹介により去る廿三日内務省衛生局試驗場に臨み數多の衛生的試驗を見られたり、又來月第一土曜日(五日)永田町華族女學校に於て常集會あるべしと云ふ。

○安藤太郎君　ハワイ國領事にして禁酒會々頭なる安藤太郎君は其令閨の病ひにより近日再び歸朝せらるゝと云ふ。

○岡山神戸の女學校　例年に似ず今年は入校者少きよし蓋し該兩校には主も關西四國九州より來學するものゆへ是亦天災の人事に及ぼし來る影響と云ふべし。

○婦人矯風會義捐會　東京婦人矯風會の會員は近日大義捐會を開らき音樂演說等を催うして慈善家の義捐を乞ひ彼の水害震災の地に救助すと云ふ而して島田三郎君も之に臨み歐米に於ける感話を演說せらるべしと承わる。

○四日市婦人會　四日市尋常小學校内に開きたる同會の定期會にては衛生上に付ての談話をなし及び水害義捐の事を議決したりと。

○母姉談話會　佐伯郡二十日市にては此れまで父兄談話會は度々開きしも今度は更らに生徒母姉談話會てふものを組織し生徒の母姉の會して談話をなさんとの計畫ある由。

○仙臺女學校　數年獨逸國に留學し居られたる大立目眞虎氏には今度自ら發て仙臺の女子教育に從事せんとの計畫にて既に其準備も略ぼ整ひたれば近々内に開校すべしとのとなるが同校の主義とする所は重もに獨逸國の實用學校に倣ひ女子に須要なる學術手藝を授くるを目的とし其科目は修身、和漢學、英語、數學、理科圖畫、家事、手藝、裁縫、衛生、唱歌等にて教員には矢吹篤武田文太夫大平一之及び島田こう長谷りう等の諸氏を聘し夫々分擔教授するとの都合なるよし。

(九月廿一日奥羽日々新聞)

○秋田婦人學會　先頃當市有志の婦人達が發起となりて題號の如き學術研究會を組織せし以來追々賛成加入するもの多く今日にては最早七八十名の餘に上れり抑此會の目的とする所は晚年篤志の婦女をして日常必須の學識を修め妻たり母たるの責務を全くし德操圓滿なる國粹主義の貞女節婦とならしめんとするに在て夫の婦人矯風會が基督を基礎としたるとは正反對のものなりと云ふ。

○裁縫女子懇親會　玖珂郡伊陸村よりの報に去る四日同地明光寺に於て三吉某女の發起にて裁縫女子懇親會を興行せり當日は同寺の本堂を以て會場となし會場の入口にはお定まりの國旗を交叉し堂の正面には諸種の活花を插し以て裝飾と爲せり午前十時頃に至り數十名の裁縫女生は三々五々袂を連らねて會場に參集す別室に於て交る〳〵茶の湯の催ありしか何れも最と優美なる手前なりき其他毬投げ揚弓輪伏せ等の遊戯を催ふし優等者へは盃短册マッチ燧引の形紙等を賞與し了つて一同宴席に入りしは午后三時頃なりき酒遊既に酣り皆ねきに及んで來賓岩政某起つて祝文を朗讀せられ其他諸氏の演說等ありて一同散會せしは午后七時頃なりき發起者たる三吉女子も兼ねて演說を爲すの心算なりしも時刻既に移りたるを以て其意を果さす下の一首を吟めり「まねきてもかへらぬものは月日なり殘りをしくも殘す言の葉」云々と見えたり。(九月十五日防長新聞)

社告

各地購讀者諸君に告ぐ

過般遞信省にて郵便條例中に改正を加へられ新聞紙及び雜誌の遞送料を半減し來る十月一日より之を實施せらるゝに就ては自今各地方の女學雜誌購讀諸君は一册遞送料共六錢五厘、十册同六十三錢、半年分同壹圓五十六錢、一年分同二圓八十六錢の割を以て郵便小爲替又は通運便にて御拂込被下候樣奉願上候也

明治廿二年九月

女學雜誌社會計掛

婦人世界發刊

此雜誌は世の婦人方の爲め有益なる事柄を記し各子弟の養育、良人の輔弼、家計の整頓、智識の發達、思想の高尚其他婦人方に必須の務めを指示ししかも精神的に之を導き其本分を全せしめんとを目的とす○文辭は極めて平易にして且つ總振假名を附け讀み易からんとを務む

初號發兌は**十月一日**定價一册**金五錢**

六册金廿八錢○十二册金五十五錢○市外一册の郵稅五厘都て前金にあらざれば送本致さず（見本入用なれば郵便印紙五錢五厘送附のと（毎號美麗なる畵二葉挿入す。

京都油小路北小路上る玉本町六番戸

令德會雜誌部

交詢案內

（催促する勿れ 郵券十錢送れ 委細に申來れ）

●雇はれたき方（乙）

六	奉公	地方師範學校卒業生にて學費に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學旁雇はれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし
七	裁縫	年齡廿三にして家內の手助けとならんが爲め內職に裁縫に雇はれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき內にて築地邊ならば通いても宜しさのと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し
十三	敎師	栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御內にても教授に雇はれたきものあり可成くは麴町か駿河臺邊を望む
一九	召使	裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇れたし
二四	奉公	年齡廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣軽の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
二五	裁縫	裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御內に教師に雇はれたし
二八	奉公	普通小學科卒業の者にて（年齡二十二才）產婆業を營まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ余暇に產婆術を學び度ものあり
二九	奉公	年齡十四歲にて基督教信徒の家（可成は西洋人）に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き每日四五時間英語學の修業致したし
三〇	通辨	年齡廿四歲にて貴婦人方の英語の通辨として雇はれ度ものあり
三一	奉公	廿一二才のキリスト信者にて裁縫を教へ家內の手助けをなし四時間通學を爲し得る家に無給にて雇はれたきものあり
三五	奉公	年齡十五才の高等小學卒業生にして余暇に勉學の出來候御宅へ雇はれ度ものあり但し給料は望みなし

A gentleman—Doctor of Philosophy, graduated in German University and was also in Kōbudaigakko, 26 years old, agreeable complexion, speaks English and German, income 1,200 to 2,400 a year—wants to have acquaintance with a lady ageing from 17 to 25 and possessing a property not less than 10,000 Y., for the purpose of later marriage.

Reference and Photograph to the office of Jogaku-Zasshi, addressed: Mr. A. B.

Great secret is secured. Photo. returned when required.

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

遞信省認可

熊本奈良和歌山福岡四縣下　災害婦女義捐金募集

一　義捐金は拾錢以上多少に限らざる事、但拾錢以下の寄附者は數人合して其姓名を一ッに記るし報ぜられたき事。

二　義捐金は女學雜誌紙上に其金額姓名を掲げ別に受領證を出さず、故に每週月曜日迄に到着したるものは其週土曜日發行の雜誌にて廣告すべき事。

三　義捐金は必らず其の何府縣に宛て送るべきかを明記せらるべき事。

四　右明記なき者は本社議定の上へ宜しきに計ふべき事。

五　締切の時限は追て廣告すべき事。

六　義捐金は勿論女性に限るべし、故に若し姓ありて名なきもの、又は無名なるもの來るときは、一切之を女性として記載すべし。

京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

災害婦女義捐金寄附者姓名

金三圓　東京麹町區飯田町三丁目明治女學校　マリヤの友
同壹圓　同　呉くみ子
同壹圓三拾錢　同　有志者數名
小計五圓三拾錢
金貳拾壹圓　横濱山手フエリス女學校　教員生徒
同五圓六拾錢　同　幼年會生徒
小計貳拾六圓六拾錢
合計金三拾壹圓九拾錢

發兌				
九月。	七日	十四日	廿一日	廿八日
十月。	五日	十二日	十九日	廿六日
十一月。	二日	九日	十六日	廿三日　三十日
十二月。	七日	十四日	廿一日	廿八日

定價

一册。六錢　郵稅。一錢（但府内無郵稅）
十册。五十八錢郵稅。十錢（同前）
半年分　一圓四十三錢　府外は　一圓六十九錢
一年分　二圓六十錢　府外は　三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行一回（廿七字詰）前金拾錢
同三回以上　一割引
同六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道徳なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京京橋區彌左衛門町殿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町眞明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田星貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年九月廿六日印刷
明治二十二年九月廿八日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1,69 six month *yen* 3.12 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.